

令和元年6月13日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02502

研究課題名(和文) 言語類型論の視点からみた日本語史の項表示の変遷：通時コーパスを利用した実証研究

研究課題名(英文) Alignment change in the history of Japanese: A corpus-based typological study

研究代表者

柳田 優子 (YANAGIDA, Yuko)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：20243818

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：上代日本語の名詞化節の3つの主語表示「ガ」「ノ」「ゼロ」格は、言語類型論の観点から、「示差的主語表示(DSM)」として特徴づけられる。近世日本語では、DSMが消失し「が」が主格として使用されるようになる。こうしたアライメントの変化がなぜどのように起こったかを日本語歴史コーパス(CHJ)を用いて実証研究を行った。上代語には、いわゆる「非人称心理述語」が存在する。この構文の特徴は原因主(causer)である主語が必ず「が」で表示され、目的語経験主が明示的に現れないことである。本研究では近世初期にこの非人称心理述語構文が非対格動詞として再分析されたことが「が」の主格化の直接の原因であると提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

我が国では日本語史の研究は国語学の領域であり、日本語の枠内での伝統的な記述文法が主流である。しかし、日本語特有の変化として記述されてきた事実を言語類型的な比較方法論を用いて分析を試みると、言語変化の一般性・普遍性と関わる現象が存在することがわかる。本研究では言語類型論、生成文法理論の観点から、アライメントと呼ばれる格システムの変化を上代から近世まで調査し、格がなぜ、どのように変化するかについて実証的研究を行なった。アライメントの変化を研究する上での問題は、歴史資料が存在する言語が少ないため、「再建」の手法を用いることが多くある。日本語は歴史資料から実証研究ができる数少ない言語のひとつである。

研究成果の概要(英文)：The subjects of embedded, or nominalized clauses in Old Japanese are marked in one of three different ways: with postpositional genitive particle ga, no or zero. The opposition between case marked and unmarked subjects fit into cross-linguistically well attested patterns of differential subject marking (DSM). This study examines a possible cause for the loss of DSM and the development of ga into a nominative case, which occurred in Early Modern Japanese. I propose that Old Japanese exhibits the so-called "impersonal psych transitive construction" in which the causer subject is necessarily marked by ga and the experiencer object is not overtly expressed. Using the extensive data collected from the Corpus of Historical Japanese (CHJ) produced by the National Institute for Japanese language and Linguistics (NINJAL), I propose that a reanalysis of this particular psych causative construction as unaccusative triggers an alignment change in the history of Japanese.

研究分野：言語学

キーワード：示差的主語表示 示差的目的語表示 アラインメント 格配列の変化 心理使役交代

1. 研究開始当初の背景

1.1 上代日本語の格システムの類型論的研究：言語は典型的に対格型、能格型、活格型の大きく3つに分類される。言語類型論では、格システムを Alignment と呼び、言語の文法・形態体系のもっとも基礎的な性質と考えられてる。また言語は歴史的にひとつの格体系から異なる体系に変化することが観察され、格体系が変化すると、それがトリガーとなり語順、ヴォイス、代名詞など他の文法・形態的特徴の変化を引き起こすことが多くの研究で指摘されている(Harris and Campbell 1995 など)。我が国では、日本語史の研究は、日本語の枠内で捉える研究が主流であり、伝統的な記述文法を中心に研究が行われてきた。しかし、日本語は世界でもっとも歴史資料の豊富な言語のひとつであり、日本語を言語学的視点から分析を試みることにより、日本語の枠内では見えなかった言語の一般性に関わる現象が日本語の資料を通して見えてくることがある。柳田(2007), Yanagida and Whitman (2009), Yanagida (2012)は上代8世紀頃の日本語の名詞化節内では、言語類型的に活格型を示すという仮説を提案し、生成文法理論・言語類型論の手法を用いて、研究を進めてきた。

1.2 コーパスを使用した史的研究：アメリカやヨーロッパでは、Lightfoot (1979, 1991)以降、生成文法理論に基づく個別言語の言語変化に関する研究が盛んに行われている。また、理論研究をする上で、生成文法理論を前提にした文法タグを付加した、通時コーパス (Penn-Helsinki コーパス) が考案され、英語の統語変化に関する理論研究を飛躍的に発展させた。日本語の歴史資料を言語学的観点から分析を行うためには、客観的、定量的なデータを使って仮説を検証するための文法・形態タグ (文法標識、品詞) を付加した大規模な通時コーパスが不可欠である。2008年からオックスフォード大学で、上代日本語の和歌・祝詞・宣命の散文資料を広範にローマ字化し (ローマ字化は当時の音韻体系が反映されている) 文法標識付き通時コーパス (上代日本語オックスフォード・コーパス Oxford Corpus of Old Japanese (OCOJ)) の構築に向けたプロジェクトが始動した。本研究では、2014年科学研究費 (基盤研究 C) にてオックスフォード大学の大学院生の協力を得て『続日本紀宣命』に文法タグを付加した (<http://vsarpj.orinst.ox.ac.uk/corpus/funding.html>)。OCOJ は上代日本語 (8世紀) のすべての和歌、散文資料に文法標識を付加し、コーパス化することを目指している。現在まで国内では、文法標識をタグした歴史コーパスは存在しないが、国立国語研究所にて品詞などの形態情報をタグした「日本語歴史コーパス (中納言) (CHJ)」が大規模に整備され、今後コーパスを利用した日本語の史的研究の発展に大きく貢献することが期待できる。本研究実施にあたり、上代語資料は、OCOJ と CHJ を使用し、上代以降の歴史資料は CHJ を利用して研究を行った。

2. 研究の目的

我が国では日本語史は国語学の領域であり、日本語の枠内での伝統的な記述文法が主流である。しかし、日本語特有の変化として記述された多くの言語的事実を類型学的な比較方法論を用いて分析を試みると、言語変化の一般性・普遍性に関わる現象が日本語の文法の中に多く存在することがわかる。日本における歴史資料を国語学領域だけでなく、言語学分野の研究領域とするためには、言語がなぜどのように変化するかについて仮説を立て、客観的・定量的データから検証可能な実証研究を行うことが不可欠であり、その基礎研究を行うことの学術的意義はたいへん大きい。本研究では、OCOJ を使用し、大規模なデータを収集し、上代日本語の主語・目的語の格表示の統語・意味的分析を行い、日本語の活格類型の実証研究を行った。また格体系がどのように変化するかを調べるために上代語以降のデータは CHJ を利用して、上代の活格体系から現代日本語の主格・対格型体系への

変化に起因する文法現象について調査した。本研究では、言語類型論的な観点から言語の格システムの変化の普遍性と個別性の実証研究として、日本語の歴史資料を使い大規模なデータを収集して、日本語の通言語的研究の果たす役割を調査することが目的である。

3. 研究の方法

オックスフォード上代日本語コーパス(OCOJ)と日本語歴史コーパス(CHJ)を使用し、主語を表示する格と目的語を表示する格、また項と動詞の間の統語と意味の関係を調査する。また上代以降の格システムの変化のトリガーとなる構文の広範なデータを収集する。菊田(2012)によれば、心理動詞が助動詞「ゆ」と現れる構文では主語が主題(theme)であるにもかかわらず「が」で表示される。このことは「が」が動作主(agent)を表示するという Yanagida & Whitman(2009)の活格仮説の反例であり、菊田は上代語の活格説に反対している。しかし、菊田が反例としてあげた構文は日本語の格変化において極めて重要な役割を果たしていることを Yanagida(2014) (Differential Argument Marking and Word Order in Old Japanese. The Diachronic Typology of Differential Argument Marking, University of Konstanz, Germany)で提案した。本研究ではこの心理述語構文の変化を上代(万葉集) 中古(源氏物語) 近世(虎明本狂言)の資料を広範に調査した。

4. 研究成果

本研究では、生成文法理論の枠組みを用いて上代語の活格型は典型的に「示差的主語表示(Differential Subject Marking (DSM))」の一形態であると提案した。Woolford (2008)は DSM の典型的分類を、統語的に3つのレベル、基本構造(Base structure)、統語(syntax)、音声形式(PF)に対応させている。Woolford (2008)に従い、日本語の DSM には、基本構造において、名詞の項の主題役割(theta role)により主語表示が分裂するヒンズー語などの能格・活格型タイプと、統語レベルで主語の「特定性・定性・有生性」により格表示が分裂するトルコ語タイプの2つの異なるレベルの DSM が存在すると提案した。DSM をもつ言語は「示差的目的語表示」(DOM)をもつ言語が多く存在する。上代語は目的語が特定名詞の時に「ヲ」格が現れ、不特定名詞ではゼロ表示で現れるトルコ語の DOM と平行性を示す。上代語の DOM に関しては Frellesvig, Horn, Yanagida (2015, 2018)で、OCOJ と CHJ を使用して大規模に実証研究を行った。上代語では「ヲ」格とゼロ格の違いは前者が特定名詞を表示し、後者は不特定名詞を表示することを示し、また、DOM は平安時代以降に消失したと結論づけた。さらに、本研究では CHJ を使用して、平安時代の「源氏物語」、室町時代の「虎明本狂言」を歴史資料として、現在の主格・対格型へのトリガーとなる構文の調査を行なった。能格型 > 対格型は逆受動態の他動詞への「再分析」、対格型 > 能格型は受動態の他動詞への「再分析」がトリガーになることがよく知られている。このことは格システムの変化が通時的なヴォイス交替と関係することを意味する。Yanagida (2018a)は、菊田(2012)が反例としてあげた心理述語構文は、「ガ」で表示される主語は、意味的に主題(theme)ではなく、原因主(causer)であり、一人称目的語経験主が音声化されされない、いわゆる「非人称心理他動詞構文(Impersonal psych transitive predicates)」であると提案した。この構文は、使役構文と同じ統語・意味的・形態的特徴をもつ。また、この心理他動詞構文はヴォイス交代をするため、「心理・使役交代(psych causative alternation) Alexiadou & Iordachioaia (2014) and Alexiadou (2016)」と定義し、統語的に Voice 範疇を含み、Voice の形態変化による「非対格化」が活格から主格型の格システムの変化に貢献したと提案した。

5 . 主な発表論文等

[学会発表](計 2 件)

- 1) Yanagida, Yuko. Alignment change and the psych causative alternation. NINJAL-Oxford International Symposium on the Japanese Diachronic Corpora. National Institute of Japanese languages and Linguistics. Tachikawa. 2018-09-09
- 2) Yanagida, Yuko. Genitive/active to nominative case in Japanese: the role of complex experiencer constructions, the 23rd International Conference on Historical Linguistics, The university of Texas. San Antonio. 2017-08-04

[図書](計 5 件)

- 1) Yanagida, Yuko (2018a) Differential Subject Marking and its Demise in the History of Japanese. In Seržant, Ilja A. & Alena Witzlack-Makarevich (eds.), *Diachrony of Differential Argument Marking, Studies in Diversity Linguistics*, Berlin: Language Science Press. pp.401-422.
- 2) Yanagida, Yuko (2018b) Differential Argument Marking and Object Movement: A Typological Perspective. In Kunio Nishiyama, Hideki Kishimoto & Edith Aldridge (eds.), *Topics in Theoretical Asian Linguistics*, John Benjamins, pp.181-205.
- 3) 柳田優子 (2018c) 「統語変化」服部義弘・児馬修(編)『歴史言語学』朝倉日英対照言語学第8巻. pp.131-150.
- 4) Frellesvig, Bjarke, Stephen Horn & Yuko Yanagida (2018) A Diachronic Perspective on Differential Object Marking in Pre-modern Japanese. In Seržant, Ilja A. & Alena Witzlack-Makarevich (eds.), *Diachrony of Differential Argument Marking, Studies in Diversity Linguistics*, Berlin: Language Science Press. pp.183-207.
- 5) Frellesvig, Bjarke, Stephen Horn & Yuko Yanagida (2015) Differential Object Marking in Old Japanese: A Corpus Based Study. In Dag Haug (ed.) *Historical Linguistics: Current Issues in Linguistic Theory* 334. John Benjamins, pp. 195-211

[その他]

ホームページ等

<http://www.yukoyanagida.com/>

6 . 研究組織

(2)研究協力者

研究協力者氏名：フレレスビック・ビャーク

ローマ字氏名：FRELLESVIG, Bjarke

所属研究機関名：オックスフォード大学

研究協力者氏名：ホーン・スティーブン

ローマ字氏名：HORN, Stephen

所属研究機関名：オックスフォード大学，国立国語研究所

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。